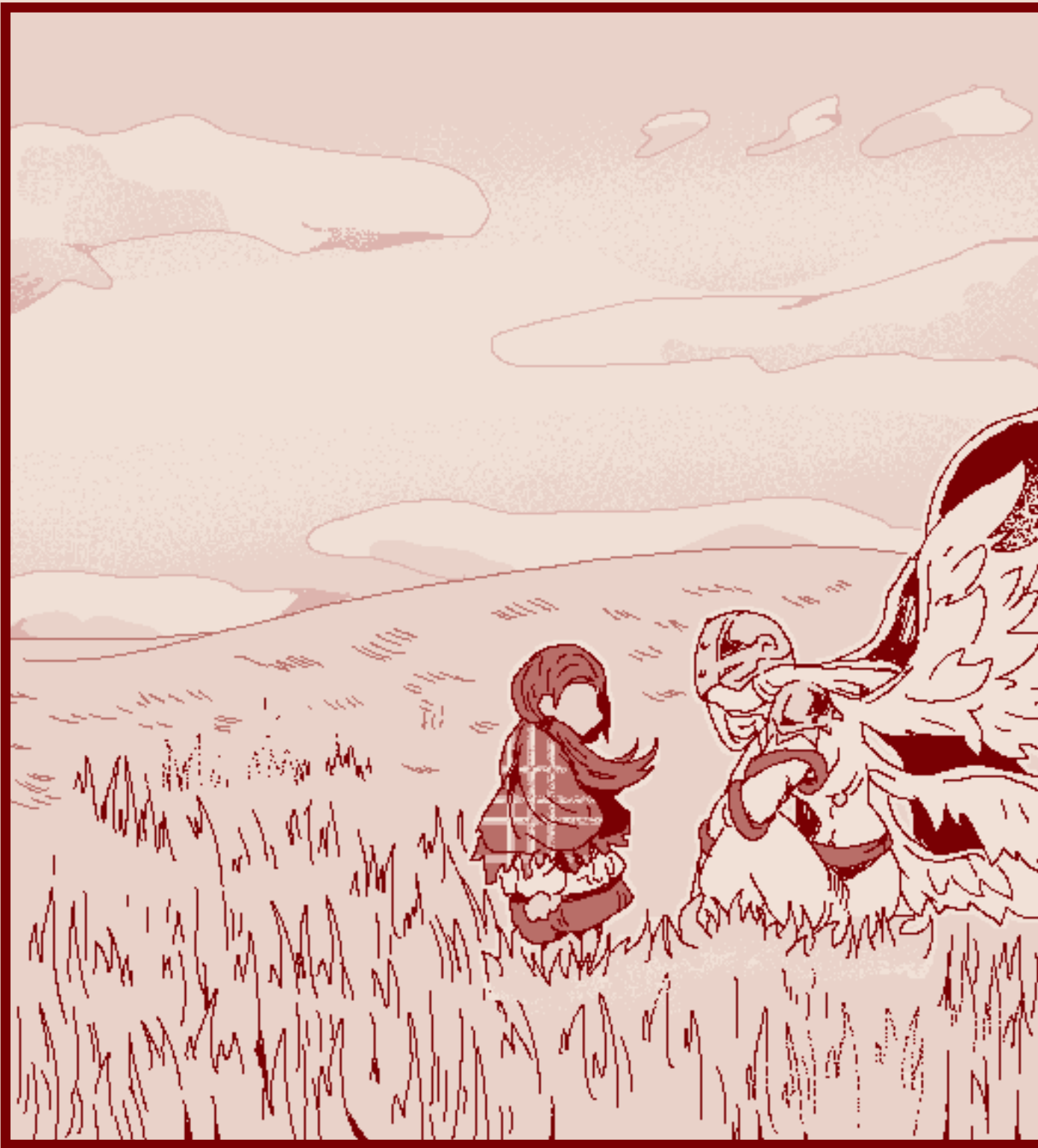




「私は汚れてるから…エンジェモンみたいに綺麗な考えはできないよ。」

なぜ今思い出すのだろうか…温く気持ちのいい風と淡く美しい空であった。

「君が優しい子なのは、私がよく知っている…君は純粋で幼い、その黒い感情に流されるのも至極真っ当な事だ。

だが、君はそれに負けずその涙を流している。

その涙は決して汚れてなんかいない。

主もしっかりと見られている。

それに…。」

「それに？」

「これから、私が君をその黒い感情から守ってみせるよ。」

なぜ…今。

轟音と雄叫びが上がり、インペリアルドラモンとヴォルケニックドラモン、そしてデーモンがぶつかり合う。

デーモンは超究極体へ進化したとはいえ、先のケルビモン達との戦闘の負傷を外面上は取り繕っていたが、癒えてはいなかった。

それでも状況としては、究極体2体に対して優位に立ち回っている。





「…っ。」

「竜馬、動いちゃ駄目だ、傷が結構深い。」

カプセルでの回復を待っと方がいい。

今は、あのふたりに任せよう。」

動こうとする竜馬をトリケラモンが制止する。

「…即興の4人だ、息だって合うものじゃないだろ。」

「いいから座ってろよ竜馬、全員ボロボロで出来る事はないだろ。」

大丈夫だろ、勇太とあいつ…兄弟なんだろ。」

「…。」

クロウの返答に、竜馬は言葉を詰ませた。

「あら、鉄塚 クロウ。」

私達だってまだ、お出来る事はおありますわ。

ホラ!いつまでお寝てますの!」

「った!」

そう言うとサンドリモンはぐったりしているベルスターモンの頭をスッ叩き、慎平とターゲットモンを見る。



状況としては、竜馬の認識が的を得ていた。

死に掛けであるデーモン相手に、苦戦する時点でその力量差は明白であった。

「勇太！一気に畳み掛けるぞ！上手く合わせろよ！」

「言われなくても！そっちこそ遅れるなよ！」

2人は笑っていた。

徐々に攻防のスピードを上げていき、ついに…。

「ぐっ!!」

ヴォルケニックドラモンの爪がデーモンの胸に傷を付ける。

それを機にインペリアルドラモンが続き、デーモンへ攻撃を与えていく。

実の部分、ふたりのモチベーションという内面ではクロウの認識が合っていた。

この土壇場では、そのモチベーションが重要であった。



デーモンが炎でヴォルケニックドラモン達を振り払おうとするが、デーモンの炎をヴォルケニックドラモンが自分のものとして剥がし、そこにラッシュをかけていく。
(この傷では、相性は最悪だな…！)



デーモンが飛び立ちビルを伝って登っていき、ヴォルケニックドラモン達から距離を取ろうとする。

しかし、ビルの内部から先回りしたヴォルケニックドラモンが飛び出し襲い掛かる。「舐めるな!!!小僧共!!!」

ヴォルケニックドラモンの喉をデーモンの拳が貫き、そのまま炎を出し、追隨したインペリアルドラモンを巻き込み地面に叩き着けられる。

衝撃に、ヴォーボモン、プイモンに退化する。



投げ出された勇太達の前にデーモンが降り立つ。
「所詮は付け焼刃だな、叶…歯向かうなら相応の覚悟はできているのだろうか？」
「当たり前だろ。」

「だけど、勇太には手出しはさせないからな。」

そう言うと、叶は勇太を庇うように前に出る。

「ほう…。」

叶の様子にデーモンが感慨深いように声を漏らす。

「馬鹿…！まだ俺な…ごふっ!？」

叶を止めようとする勇太であったが、吐血し動きが止まる。

（血…!?気付かなかったけど潰れてる右目だけじゃなくて左目からも…？）

急に何度も究極体に進化させたツケか!？）

「随分無理をしているみたいだな小僧、今楽にして…「ブイモンヘッド!!!」「プチフレイム!!!」

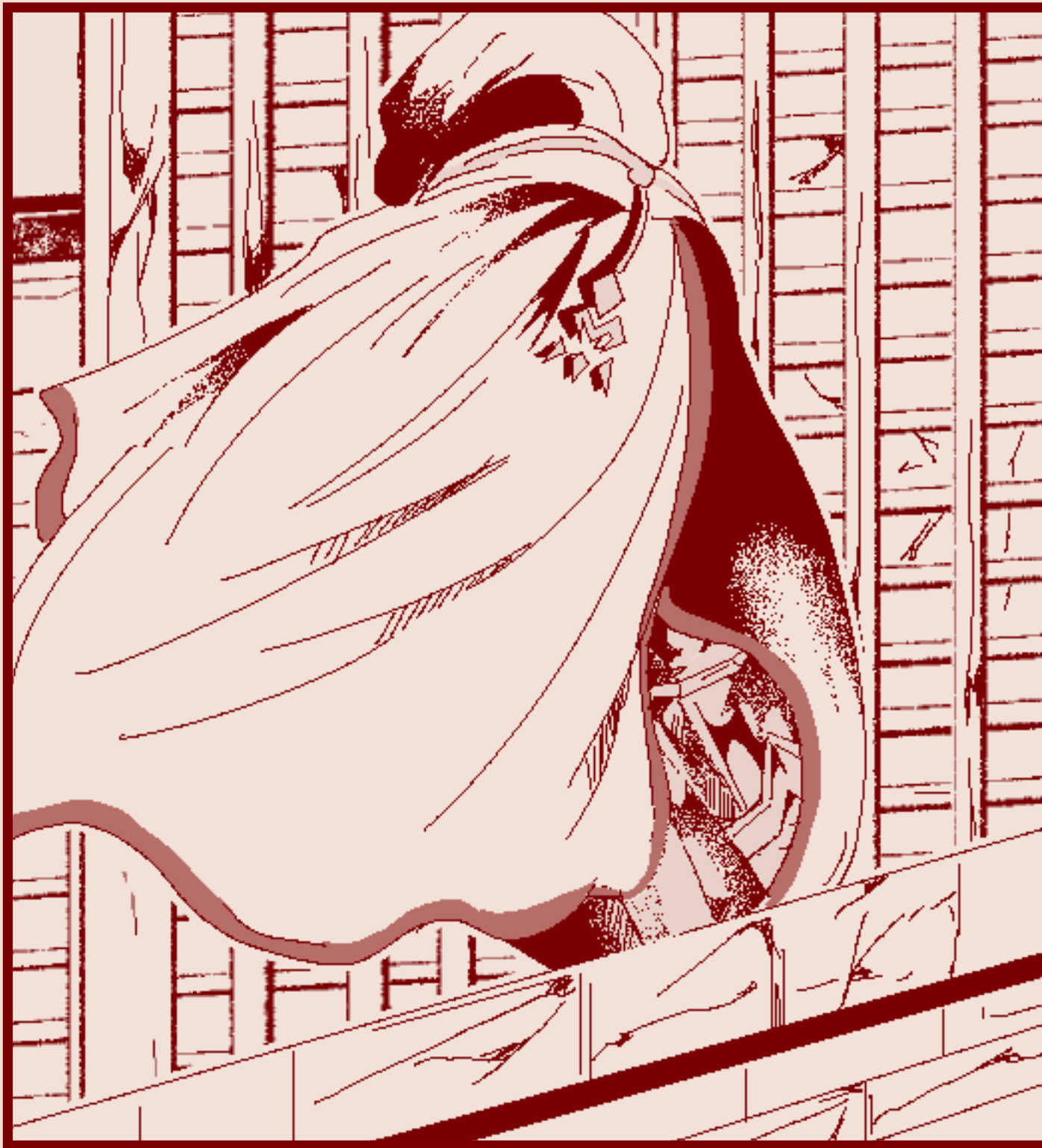
「ぬっ!」

勇太達に手を伸ばすデーモンに向けて、ブイモンとヴォーボモンが攻撃を与え怯ませる。



「へへ、逃げなかったね叶。」

「…お前もな。」



デーモンとの闘いをビルの上から眺めているマントを被った者がいた。
「ねえ！作戦はいいけどこれ助けに行かないと不味いんじゃない!?」
「う〜ん、勇太様とそこご親族とは言えちょっとお目算お誤りましたわね…！」

駆けだそうとするサンドリモンにマントの者が塞ぐように降り立つ。
「んだ！てめえ！」

殴り掛かるベルスターモンの攻撃をマントの者が顔面で受け止める。
「いたい…。」

「なんだこいつ…。」
(だが、喰らったんじゃねえ受けたんだ…しかもビクともしねえ。)

「!…やめんか！君は…なんでここに。」
「今回の件は、我々も注目をさせてもらっていたのです。」

すみません…正体を見られるわけにもいかないので名前は呼ばないようにお願いします。」

「あ…あの、とにかく助けないと。」

「そ…そうでした！ケルビモン手を。」

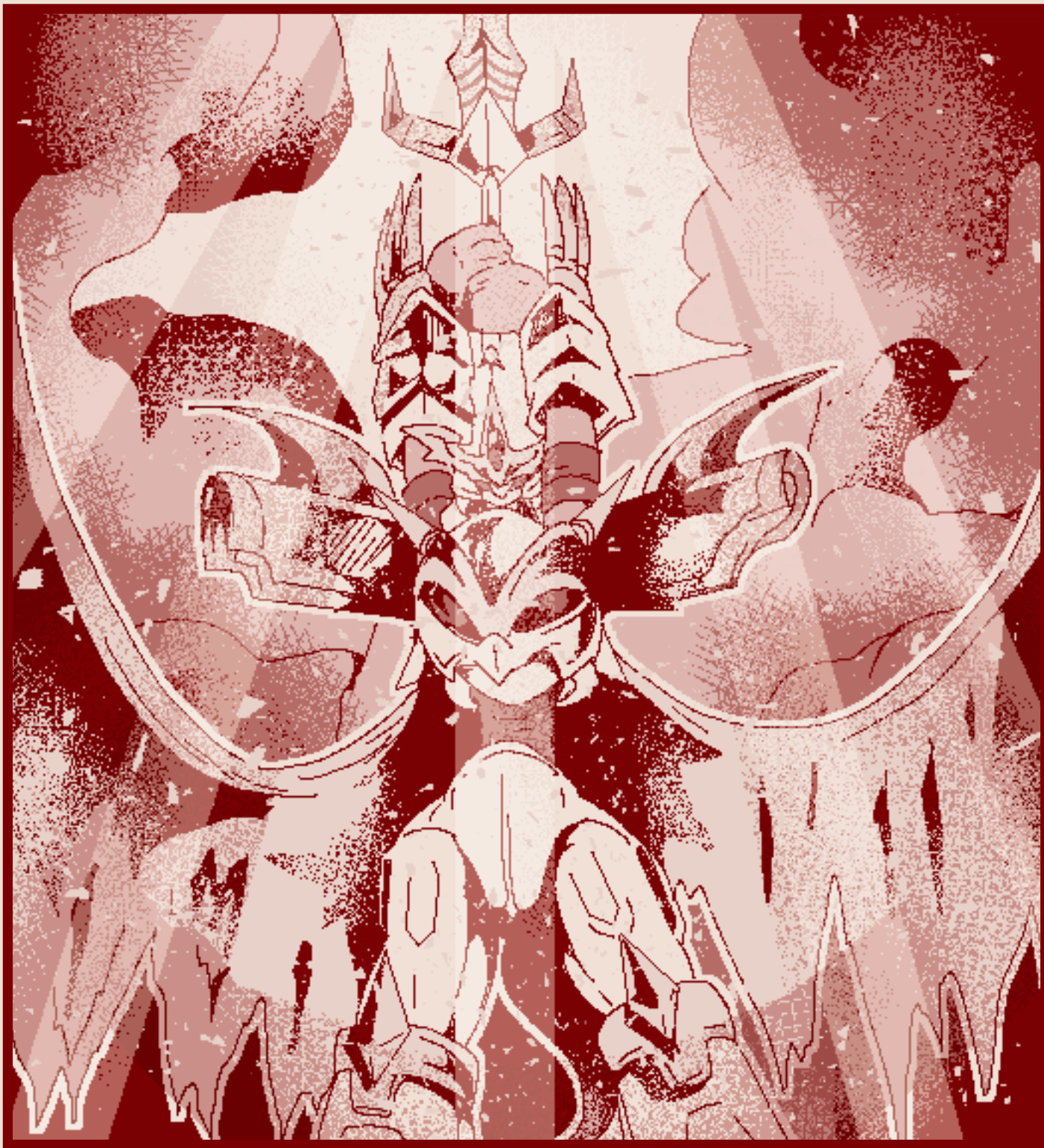
私を通じてあの少年とブイモンに。」

「…分かった。」

ケルビモンが手を重ねると光輝くホーリーリングになり、勇太達の方へ飛んでいった。

「…っ。」

力を出し切ったのかケルビモンはアンティラモンに退化し、膝を付いた。



叶達に手を伸ばすデーモンを飛んできたホーリーリングが吹き飛ばす。

「まさか…これは!!？」

ホーリーリングが変形し剣へとなる。

それをブイモンが握った瞬間、ブイモンとヴォーボモンが光に包まれ進化する。

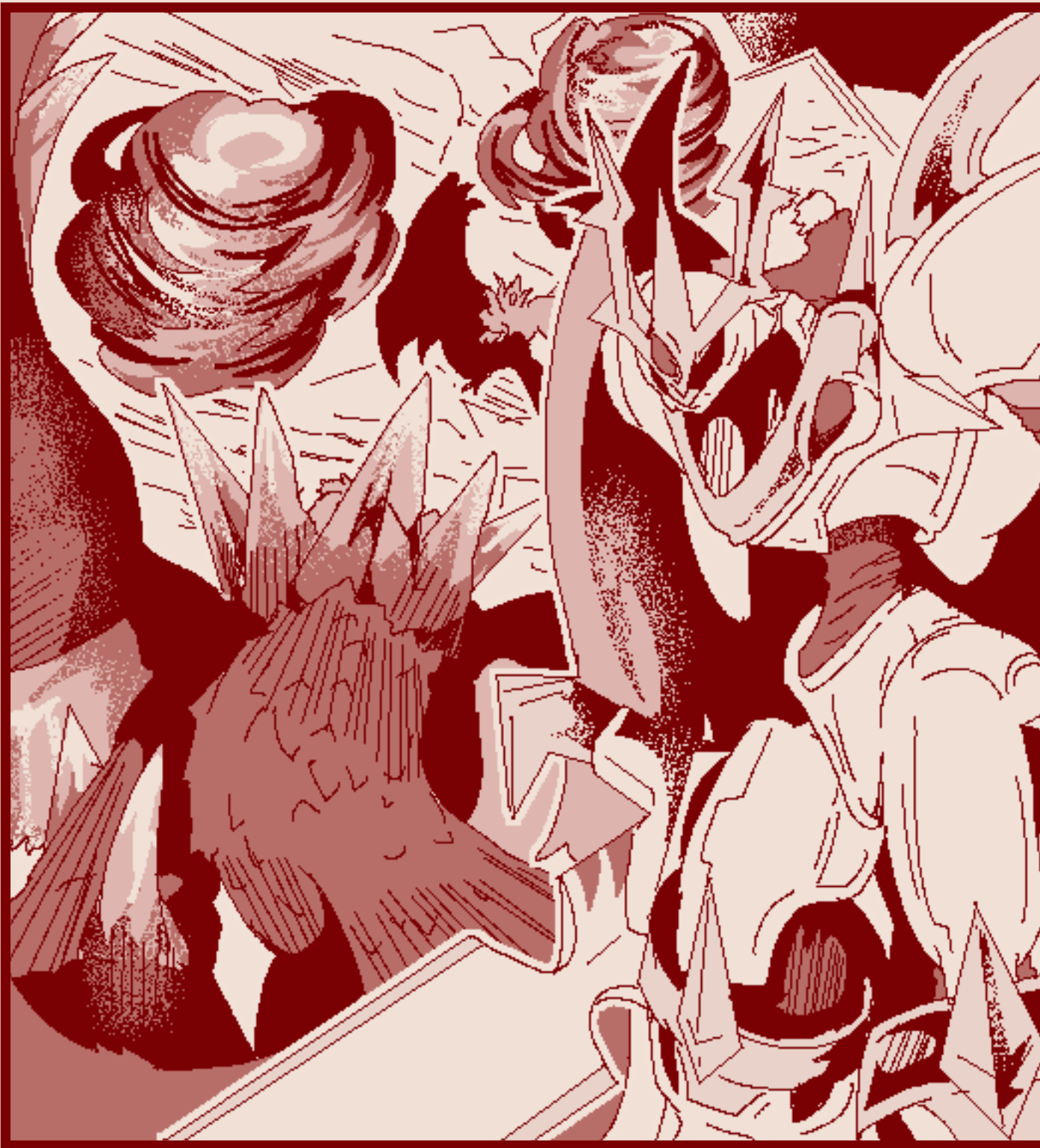
ヴォルケニックドラモンとブイモンは人型の白いデジモン、インペリアルドラモン・パラディンモードへと進化した。



「…これが俺達の…」

「そうだ、叶。

行こう。」



「先行する！止まらず突き進め叶！

ひとつだけ言っておく！俺達を信じろ！」

勇太とヴォルケニックドラモンが先行してデーモンへ向かって行く。

「チッ!!!」

インペリアルドラモン・PM を寄せ付けないようにデーモンが火球を射出する。

「ぐっ!!!」

ヴォルケニックドラモンが、なんとか火球を掻き消していく。

しかし、火球の威力にヴォルケニックドラモンが吹き束されインペリアルドラモン・PM が無防備になる。

「叶!!!!」

「止まるな！勇太達を信じろ!!」

インペリアルドラモン・PM がその言葉を信じスピードを落とさず突き進む。

火球が目の前に来た瞬間であった、後方へ吹き飛ばされたヴォルケニックドラモンが体当たりで火球をなんとか弾き飛ばす。



「火球を防いだところで！」

デーモンがインペリアルドラモン・PM を迎え撃とうと構える。

カウンターを撃ち込もうと瞬間、電撃の様な砲弾がデーモンを撃ち抜き態勢を崩した。

デーモンが砲撃された方向を見る。

「当たった!？」

「三下 慎平! 貴方がお一番お元気なんですからシャキっとお支えなさい!」

「馬鹿言うなこんなもやしにそんな事できるか!!! 当たったんだからいいだろ!」

「というかあのマント野郎! 進化させたらさっさとどっか行きやがって最後まで付き合えよ!」

ジャンクモンとチンロンモンがデジクロスした砲撃であった。

砲台を慎平達全員で支えなんとか一撃を加えた。

「貴様ら…!!」



一瞬、デーモンの注意が慎平達に移った瞬間、インペリアルドラモン・PM の斬撃がデーモンの肩から胴を切り裂く。

「があああ!!!!…貴様あああああ!!!!」

デーモンが切断された部分を瞬時に修復し、インペリアルドラモン・PM に殴り掛かる。



先手を取ったインペリアルドラモン・PM がダメージを気にせず最後のチャンスと連続で斬りかかる。

それをデーモンが応戦するが、流石に今までの応酬のように捌き切れずダメージを負っていく。

(それでもまだ足りないのか!?)

しかし、デーモンはそれでもインペリアルドラモン・PM の鎧を砕き、肉を抉っていく。

お互いが吹き飛ばされ、間が出来る。

この距離はお互いがお互いの命に手を掛けられる一撃を加えられる技を繰り出せる間合いであった。

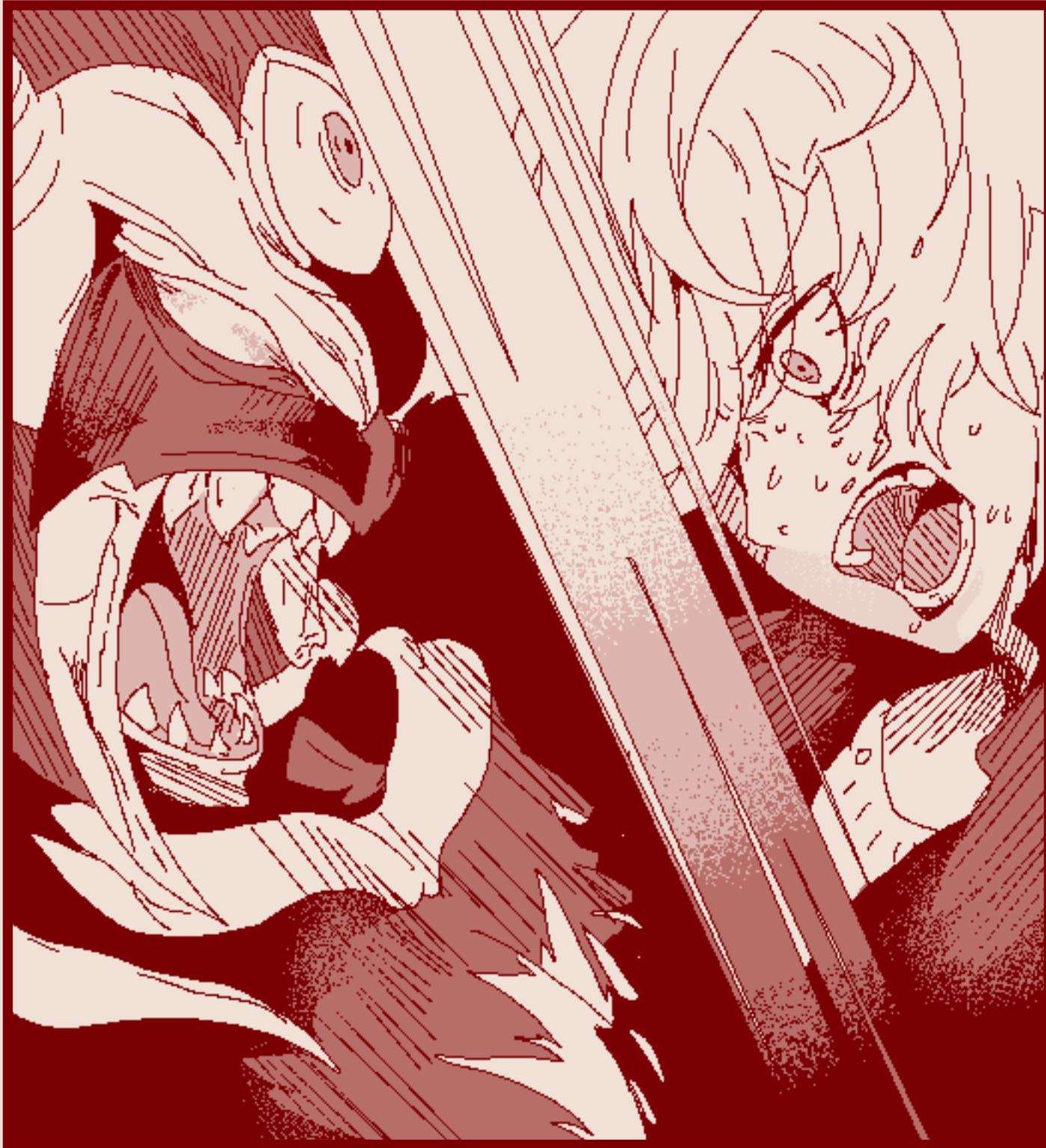
「…っ!」

「っ!」

「叶!!!! 飛べえええええええ!!!!」

勇太が叫ぶ。

その叫びに呼応し、インペリアルドラモン・PM が振りかぶり飛びかかる。



「馬鹿が!!!!」

カウンターでデーモンがインペリアルドラモン・PM に殴るが蜃気楼のように消える。
(これは!!!????)

それは勇太がフェアリモンの力で作り出した蜃気楼であった。

デーモンの直撃するはずの攻撃はインペリアルドラモン・PM の左肩の鎧を破壊するだけであった。

「デーモン!!!!!!」

「叶!!!!!!」

振りかぶったインペリアルドラモン・PMの剣がデーモンの胸に深く突き刺さりそのまま押し倒す。

「!!!!!!」

声にならない正しく獣の断末魔が上がる。



その雄叫びに誰もが息を呑み突き刺した叶達ですら、竦んで動けなくなってしまった。
数刻の後、雄叫びは弱くなり小さくなった。
遂に勇太達はデーモンを討ち取った。

「はぁ…はぁ…はぁ…」

なぜ今思い出すのだろうか…温く気持ちのいい風と淡く美しい空であった。

